

識者の見方

台湾の蔡英文（ツァイ・インウエン）総統と米共和党のマッカーシー下院議長が5日、会談した。バイデン米大統領ではなく、共和党の下院議長との会談という点に留意は必要だが、声明で示されたように米議会では对中国の超党派的な合意が形成されている。



東大東洋文化研究所准教授

佐橋 亮氏

米台関係は1979年の断交以降で、名実ともに最も深まっているといえる。米国側は地政学や半導体産業などの「利益」の側面だけではなく、「成功した民主主義」という「価値」の面でも台湾の重要性を強調した。

米台関係は1979年の断交以降で、名実ともに最も深まっているといえる。米国側は地政学や半導体産業などの「利益」の側面だけではなく、「成功した民主主義」という「価値」の面でも台湾の重要性を強調した。

中国側は反発を強め、海軍の空母「山東」を太平洋上で展開した。ただ昨夏に当時のペロシ下院議長が訪台した時のような緊張関係が高まる事

態にはならないと考える。米台はともに台湾危機を避けたいと考え、マッカーシー氏による訪台を避けた。中国側も訪台に比べればマシだと捉えている。3者間の政治的な思惑がうまくかみ合ったように見受けられる。

一方で、米中間のコミュニケーションションチャネルが過去に比べて弱いのも事実だ。今後、米下院の中国特別委員会からより強硬な対中政策が打ち出されるといった不透明要因も残っている。綱渡りの状況が続いているのは間違いない。

米中台、かみ合った思惑